

平成20年 1月 1日

「 年 頭 所 感 」

衆議院議員 麻 生 太 郎

新年あけましておめでとうございます。

重大な選択となるこの年のはじめにあたり、まずは皆様にとって実り多い一年となりますようご祈念申し上げ、そして日本の先々に、ぽっと灯りが幾つもさすような豊かな1年となりますよう、決意を新たにします。

旧年中は私に対して言葉に出来ぬほど多くのご支援、ご鞭撻を賜り、感謝いたします。就中、三度目の挑戦となりました秋の自民党総裁選に際しましては、皆様の有形無形の励ましにどれほどの勇気を頂いたか、身の震える想いでありました。我が党、自民党が苦しい惨敗を喫しました夏の参院選に関しましても、私は、政権党たる自民党が新時代の荒波にこぎ出すために自らの位置を定め直し、再生を期するための貴重な叱咤激励だったと受け止めております。それは、総裁選後、全国各地に足を運んで国民、有権者の方々の生の声を聞き続けて、次の挑戦に向けた私に対する期待の高さ、今の政治に対する注文の深さや豊かさとして日々、確認し続けていることでもあります。

< 動く国際政治 >

さて、この一年は私にとっても世界にとっても次の十年、二十年を左右する大きな分岐の年であります。

何より、国際社会の中で最も根幹的な二国間関係であり、私たちの大事なパートナーである米国で秋には大統領選が行われます。ただ、問題は共和党が勝つか民主党が勝つかといった皮相な「選択」ではありません。

成熟した民主主義国家である日米両国にとって、党派の違いで大きく外交路線や両国関係が変わるはずもなく、また変わるべきでもない。なら

ば日本にとって肝要なのは、パートナーの政権交代の期にもう一度、国際社会の平和と安定に資する日米関係を再認識することです。

対北朝鮮、環境問題等々、日米両国で微妙なスタンスの差のある問題は少なくなく、その差ばかり着目した論調や議論が先行していますが、それぞれ二億、一億の民を抱えた大国が何から何まで意見を同じくすること自体があり得ない話です。小異を乗り越えて大同につくこと、さらにいえば、世界の超大国が道を誤らないように、時に叱咤激励することが正しいパートナー、私のいう友好的対抗者たる日本の進むべき道だと信じます。

北京五輪に向けて国家成長の道を急ぐ中国、IT産業を中心に急成長するインド、そして大統領選を経た韓国等々、アジア地域でも各国の動きは激しいのですが、旧来のアジア外交で先が読めぬ展開だからといって悲観していいはありません。私はここでも、戦後の高度経済成長と社会の分裂回避を両方成し遂げたいわば先輩の民主主義国家として私たちが、蓄えた知恵に基づき、時に辛口でもアドバイスをしていけば、必ずや、よきアジアの隣人という呼び名を手にすることが出来ると確信しております。

< 未知を拓く保守 >

もちろん最も大事な選択は、皆様の生活に直結するこの国の将来、日本の政治の将来に関わる選択であります。ただ私は実はその選択は国際社会のそれと同じコインの表裏であって、肝に銘ずべきポイントも同じだと思います。

冷戦が終わり、社会主義国家の敗北が明らかになり、しかしそれで西側の自由主義・民主主義国家がハッピーなその後をずっと送ってきたかということ、そうではありません。外には民族・宗教対立に根差した地域紛争が続き、内には競争原理に基づく経済改革の結果生じた格差感や将来の不安感の拡大があります。つまり、自由民主主義は今や、国の内外で国民各層、あるいは個々の国民の利害が対決する一種の分裂状態をいかに統合し直すかという重い課題をつきつけられているのであります。

日本では確かに昨夏の参院選で民主党が参院第一党となり、衆参で多数派が食い違う逆転国会となりました。だが私はそうなったその日から、この逆転状況はただ日本政治の不安定さを生むばかりではない、権力の一端を担う民主党と精緻な政党間協議を実現することで、日本の議会制民主主義がさらに国民各層の要求を柔らかく包摂する次のレベルに向上できるのだと説いてきました。日米関係の根底を成すテロ新法にせよ、国民の不安感を助長しかねない年金問題にせよ、大切なのは二大政党が知恵を出し合い、妥協点を見いだすことであり、その真摯な努力を国会の表舞台でみせることができれば、国民・有権者の皆様からの信頼の回復にもつながります。その気持ちは今も変わりません。

だから、その最初の試行錯誤の舞台である臨時国会で政党間協議が完全に機能しないといって私は悲観的にはなっていません。大連立構想や、逆にテロ新法での与野党の全面対決など、権力獲得・維持といった政局優先でこの混迷状況をなで切りにしようとする方もいますが、それは近道に見えて実は脇道です。

考えてもみてください。仮に来る総選挙で、自民、公明の与党が過半数を維持して政権を担い続けても、今ある三分の二を失えば、参院が否決しても衆院で再議決する手立ては失われ、また予算審議で与党単独では事を成せない限界に行き当たる。他方、民主党にせよ、総選挙で勝利して仮に単独過半数を越えても、次の参院選までは、共産、社民両党の協力がなければ参院で過半数は得られない。つまり、どこかで政党間協議のルールを新しく構築しなければ、国民・有権者が最も欲する安定的な政策遂行は見えてこないのです。

政局が混迷する場合、政治家は三つの種類にわかれます。旧来的な発送から抜けられず、古い革袋に酒を注ぎ込もうとしてあふれさせてしまうタイプ。結局、何も変わらないのだと制度のせいにして評論家を決め込むタイプ。そして三つめは未知との遭遇を恐れず、過去の教訓を大切に、新しい道を探るタイプです。

こう記せば、誰しものが三番目の選択が正しいと感じるでしょう。私が昨秋の総裁選以来、次の時代を画する言葉として唱えている「保守再生」

も同じです。若者に人気のある槇原敬之さんの名曲「遠く遠く」の一節に「大事なのは変わっていくこと / 変わらずにいること」とありますが、保守の神髄は、時代を超えて変わらぬ評価を見定め、だが時代に合わせて自ら改革し、その価値を実現することにあります。

< 国民と政治の共鳴 >

だとすれば自ずと、日本の政治が歩むべき道程は明らかであります。国民の皆様が誇りを持てる国家とするため、その意思を表明すべきテーマに関しては堂々と正論を説き、批判者を理解させる筋が大切です。他方、例えば次世代を担う若者たちがワーキングプアと称される現状は変えるべきです。経済成長と格差感の拡大の是正を同時に成功させねばなりません。それには国民各層を代表する様々な声、あえていえば少数意見も私たち自民党は懐広く吸収していかなければなりません。

国際貢献や憲法改正、公教育の改革といった国家理念の再構築と、経済格差の是正と日本社会の統合。その両方を達成することが保守再生の眼目であって、それは戦後の日本政治の単純な保守か革新かといった二分法からは出てこない新しい政治姿勢です。言葉を換えていえば、テロ新法に関しては堂々と民意に与えられた三分の二という多数の勢力を使うにしても、国民の生活に直結する予算審議では粘り強く民主党、野党との更なる多数派構築を追い求める。そうした大人の政治が自民党だけでなく、民主党にも求められていると感じます。

もとより、政治の根幹は「信なくば立たず」です。政治家の側に国民と共に達深い共感と、その共感を現実のものとする言葉がなければ、以上のシナリオはまさに絵に描いた餅となってしまいうでしょう。宙に浮いた年金問題ひとつとってもそうです。

政権党の宿命として、足らざる部分があれば素直に認め、それでも実現すべき改革には背を向けない。皆様が望む我が国の指導者に必要な資質は、共感というメッセージ力、信頼という具体的な政策の立案力ではないでしょうか。私もまた、自らの足らざる部分を補い、守るべき理念と政策をさらに磨き上げて、この国の行く末を誤らぬよう、日々精進する決意であります。